



共立研究

東京基督教大学 共立基督教研究所

〒270-13
千葉県印西市内野3丁目301-5-3
TEL. 0476 (46) 1131 (代表)
FAX. 0476 (46) 1405

Vol. III No. 2 1997年12月25日

「正統主義神学の刷新を めざして」

ヘンドリック・G・ヘルツェマ
稲垣久和 訳

時代は急速に変貌しつつある。神学が真に生きた学問として、時代の要請に応えるにはどうすればよいのか。また神学と哲学との関係はどうあるべきなのか。先頃、オランダのキャンペンで「神学とキリスト教哲学」と題する研究会議が開かれた(1996年6月)。今日の改革派正統主義神学は、時代が投げかける課題に、どう対処したらいいのか。神学者とキリスト教哲学者の間で白熱した討論が行われ、実り多い成果をあげた。訳者はちょうど研究休暇でアムステルダム自由大学を訪れていた時であり、参加者たちと親しく話をすることができた。最近そこで発表された論文が *Filosofie en Theologie** (Buijten & Schipperheijn, 1997) と題する本として出版された。訳者はこの本を翻訳したいと思うが、時間の関係で今それができないでいる。せめてその中の主要論文一篇だけを翻訳することにする。日本の神学界にも資するところがあるに違いない。以下に訳したものは、ヘンドリック・G・ヘルツェマ “Achtergronden van en uitweg uit de impasse van de gereformeerde theologie” と題する論稿である。ここで神学と言われているのは、ヨーロッパ大陸それもオランダの保守派の改革派神学 (de gereformeerde theologie) のことであって、英語圏のそれではない。

〇はじめに

この論稿でまず扱わねばならないのは、「今日の改革派神学の行き詰まりからの転換」ということである。こんなテーマが掲げられること自体、実際、改革派神学がこの時代の文化から相当程度に遊離していることを物語っている。もっとも、だからといって、私は改革主義哲学が、神学を構築していく道具を提供できる、などと言うつもりはない。むしろ、私の理解するところの改革主義哲学から、この行き詰まり、といったものに取り組んでみたい。それによって行き詰まりの背景を明らかにし、解決の方向性を探りたい。

そうは言っても、やや気おくれも感ぜざるをえない。

なぜなら私は今日の“改革派神学”をあまりよく知らないし、神学の研究者でもないからだ。ただ、あれこれの機会にそれに触れてきたにすぎない。だから、

目次

* 「正統主義神学の刷新をめざして」

ヘンドリック・G・ヘルツェマ
稲垣久和 訳

* 「The Charismatic Movement and Japanese Culture. Part 2」

Dr. W. Robert Shade

そこから、行き詰まりの方向が与えられるかどうかは定かではない。でも次のように言えるであろう。このような問題意識は、1994年の「改革派神学の生命力」に関する研究会議の際に与えられつつ強められた、と。特に Van Genderen と Velema の「改革派神学提要」(Beknopte Gereformeerde Dogmatike) への S.Meijers 博士の批判的応答は、私と同じ様な方向を示しているように思える⁽¹⁾。しかし私の見るところ、改革派神学総体としての現状は十分に理解されているとは言いがたい。

今日の行き詰まりの背景は、改革派神学が非キリスト教思想に対してとってきた態度にあると思われる。特に、哲学に対して。ここで、まず第一にギリシャ的合理主義、次に啓蒙主義の批判的思惟、さらには19世紀以来発展させてきた歴史概念、これらに対してとってきた態度を調べてみよう。まず言えることは、改革派神学がギリシャ的合理主義に無批判に追従したことが、逆に現代思潮への過度の批判を招いている、ということである。現代思潮はキリスト教信仰からほど遠いところにあるのだから、批判的態度は当然といえば当然なのだが、ただ、ギリシャ的思惟にも現代思潮にも、聖書の契機がないわけではない。

私の思考は改革主義哲学(de reformatie wijsbegeerte)によって形成されてきた。この哲学は哲学的問いに対して、神の言葉に基づいて回答を探そうとする。また私は、20世紀のユダヤ思想、特に、E.R.Huessy の影響も受けている。さて私のアプローチを簡潔に表現するならば、二人称のパースペクティブと呼べるであろう。これは古典哲学が真理の客観的所与性を強調した三人称のパースペクティブ、そして現代哲学が主観への転回を遂げた一人称のパースペクティブであること、これらに対比した言い方である。この見方によって、客観主義と主観主義の両極端への分離を回避しうる可能性がある。⁽²⁾

1. キリスト教信仰と古代哲学：知性主義への傾向

(1) 問題

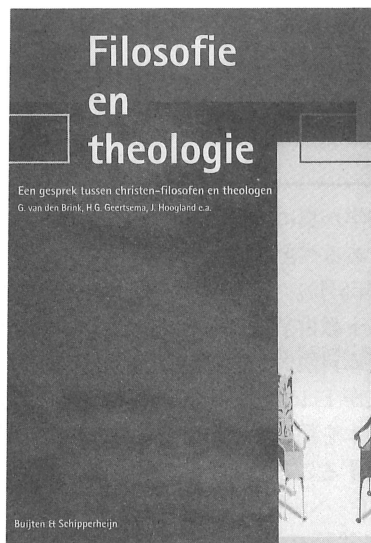
キリスト教信仰と古代哲学との遭遇の際に、何がしかの‘ズレ’といったものがなかったであろうか。それはごく単純化して言えば、次のようなことであろう。具体的な日常の実在の中で、神と共にある人生と関係しつつ、聖書の教理があるはずなのだが、そのようなつながりがなくなり、その教理自身が自己目的化してきたということ。つまり具体的な生とのつながりが二義的なものとされているということ。もし生とのつながりの認識なしに、または具体的な

生とのかわり抜きに聖書の真理が教えられるならば、生それ自身に対する聖書の真理の意味を強調することは、かえって逆に、人工的な印象を与えることになってしまう。もし聖書の教えが、自らの生自身との関係の中で納得させられていくのでなければ、生自身にとっての聖書の教えの意味は外的なままにとどまり、真の理解へととはつながっていかない。

キリスト教信仰の教理というものが、そのものとして学ばれ、かつ真理として受け入れるような多くの調和的真理の外にある、などと考える人はいないであろう。信

仰とは、単に、あれこれの教理事項の保持以上のものだ、と考える人にとってこのことはさらに深く追及する価値がある。しかしながら教会教育の実践の場においては、むしろ次のようなことが問題になるのではないだろうか。信仰と体験とを密着させることになぜそんなに心配するのか。体験なき生というものが存在するとでもいうのか。信仰生活なき信仰などというものがあるとでもいうのか、と。

こういった疑問に答えるために、例として「教訓」ということばをとって説明してみよう。この言葉自体は教会外でも使われるが、特に、詩篇の‘教訓詩’(leerdicht)と呼ばれるものを見してみる(私はヘブル詩ではこの表現が確立していないということは知っている。たとえば表現は適切ではないにしても、聖書の



「Filosofie en Theologie」

文脈の中でどのような教えがそこに意味されているか、ということの例にはなるであろう)。特にこのようなタイプに分類しうるのは、詩篇 42-43 と 74 であろう。これらの詩篇においては、個人的な状況にしろ、エルサレムにおける神殿崩壊にしろ、神への深い実存的要求から語られている。いったいなぜ‘教訓詩’なのか。私は、詩人がわれわれに、同じような状況でいかに語るべきか、特に神に向かっていかに語るべきかを、教えようとしたのではないかと思う。聖書の教えはわれわれが要求、悲嘆、罪、喜び、疑問に遭遇したときの手助けとなるであろう。しかもわれわれの体験と直接に関係するような仕方である。

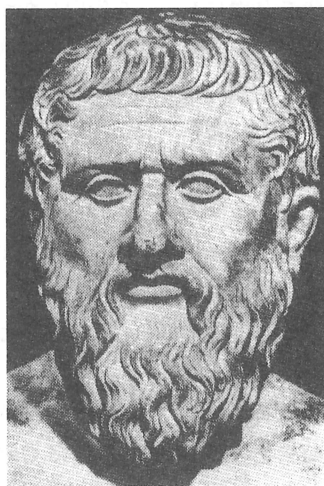
信仰の教えが、多くの人にとっていかに遠いものになっているかを示す別の例をあげてみよう。これは教義学と倫理学の関係一般について言える。特に、パウロのローマ人への手紙のよく知られたアプローチをとりあげてみる。このようなアプローチによれば 1 章から 8 章(または 1 章から 11 章)まではわれわれの信すべきことが、12 章以降はわれわれの行動すべきことが、書かれている。アリストテレスの理論知と実践知の区別にしたがって、最初の 8 章はより理論的、後の 4 章はより実践的と考えられている。あたかも最初の 8 章は、生それ自身とはまるで関係ないかのごとく。しかしながら、もし、ローマ書の最初の 8 章が内面的なこと、人格と人格との関係の中でのわれわれと神との生の核心、人間存在の具体性に関わるのであって、われわれが単に“お勉強”すべき教義ではないということが、教会教育の中ではっきり語られ実践されているのであれば、パウロがここでわれわれに教えていることが見過ごされてしまう。まさにルターにとっては、信仰体験の核心がこの箇所にあったのではなかったか。

確かにここで、パウロがわれわれに伝えようとしたことの本意を隠すものは、古典哲学的思惟の影響によるものだけではない。しかし、それでも、古典哲学的思惟は大きな役割を果たしている、と私は思う。以下、このことを明らかにしてみよう。

ギリシャ哲学的思惟の影響

ギリシャ哲学を一言でこういうものだ、と言い切ることはもちろんできない。様々な局面があり、その展開の仕方も複雑である。しかしながら、ギリシャ哲学が合理的方法と、その全体としての実在の見方およびそこで人間の位置について発見したことについて、あまり注意が払われていない。その中心は論理的議論(パルメニデス、アリストテレス)と概念の分析(ソクラテス、プラトン)である。

この発見が、キリスト教信仰の教理形成と正当化に、意味を持たなかったはずがない。この発見は、思惟



プラトン

のこの新しい方法によって実在それ自体についての決定的な真理が見い出されると主張したこと、そのことのゆえに、一つの問題となった。そしてこのことは、事柄の初めからかなり目だっていた。もっとも、キリスト教信仰全体として一致していたわけではないのであるが、いずれにせよギリシャ的思惟の絶対化の傾向を回避していくすべを知らなかったことは確かである。つまりこういうことである。

この合理的方法の発見というのは、何よりもまずパルメニデスに帰

せられるのであるが、彼はそれを女神の啓示と見なした。この方法は、彼に日常生活の暗闇から真の実在の光への道を開くものであった。思惟と存在とが固く結び合っていたので、それらは互いに区別できないほどであった。プラトンは日常経験で身につける実在の知識を、洞窟内の囚人が実在について持つ意見にたとえた。彼らは、現実の物や人の形像の影を見ているに過ぎないのである。ただ哲学者の思惟だけが、真の実在を形成しているイデアの世界への導きを与える。

世界は具体的な経験を通して知られるのだ、といった世界に対する信頼感が、パルメニデスとプラトンによって根本的なところで失われてしまった。彼らに従えば、世界は現実には存在しないし、本当の知識も可能ではない。生成したり消滅したりするもの、また過ぎ行くものは実在の本性とはなりえない。プ

ラトンにとって、堅固な序列をもったアイデアの世界が永遠的にかつ不変的に本当の実在である。そしてそれについての思惟が正しい思惟である。アイデアの世界のみが思惟にとって到達できる世界である。いや少なくとも思惟がそれを目指して向かうことのできる世界である。神々の永遠の知識が、死すべき人間が目指していくべき理念を形成している。

キリスト教信仰の初期においては、このプラトンの思惟を全体としては受け入れなかったし、また受け入れようとしなかった。ただ、一神教の観点から、最高存在というアイデアをその完全性ととも採用し、また物質的存在と精神的存在の間の緊張を基礎にして、救済に言及するのみであった。そして、一方で創造信仰、他方でイエス・キリスト——われわれの神への背反としての罪ゆえに十字架につけられ、よみがえったイエス・キリスト——への信仰が、地上的実在が単なる仮象へと還元されてしまうことから回避させた。さらに思惟ではなく信仰が本当の真理への道なのだ、ということをも教えた。神がわれわれに自らを啓示されたのである。だからギリシャ的思考の名残といえば、永遠、不変の真理としてのアイデアということになるが、それもその起源は神の霊にあり、知ろうと思えばそれなりに知られると考えられた。啓示とは、われわれに理解される限りにおいて、この真理のわれわれへの神の側からの宣言と考えられた。

ところが、キリスト教的思想の内部においては、このような方法に基づく厳密な意味における真の知識の概念は、ギリシャ哲学によって徐々に規定されることになる。特に救済的知識は、神の中にあるような永遠、不変の真理であり、神によってわれわれに啓示され、われわれは信仰をもってそれを受け入れる。それゆえその知識は正確に定式化され、“完全にしかも汚されることなく”(アタナシオス信条)守られねばならない。

ここにおいて真の教えというものが、神との交わりにおける具体的な生から切り離されることとなった。またそのことは、教会の存続がそこにかかっていたために、純粋に伝承されてきた。このようにして正統主義は容易に自己目的化して、神との交わりの内面的生命、敬虔さ、われわれの存在の具体的状況に

おける主への生き生きとした服従、というものを失ったのである。

改革派神学において、たとえ聖書の教理と神との生きた交わりが同時に受け入れられるよう強調され、そして現実過去において両者が結び付けられたし、現在もそうであったとしても、私の印象では、先にのべたようなギリシャ哲学の影響が依然として存在している。

しかし、現代、人々の精神的状況はまったく変わった。多くの人々にとって伝統的な教会の教えが縁遠くなってしまい、教会ごとにそれぞれの仕方信仰を告白しかつ教えるようになり、聖書そのものも時代と文化に依存するものとして見られるようになり、権威に基づいた信仰が内的矛盾をもって体験されるようになり、すべての事柄が経験と確からしさを抛り所とする、そういう時代となったのである。このような時代、正統主義信仰の概念は多くの人々がもはや、ついていけないものとなっている。

(2) もう一つの選択

これに対して、われわれは出発点を経験それ自体に、信仰の主観的受けとめ方の中に取りべきであろうか。実際、多くの人々はそう考えている。しかし私は、それでは解決にならないと思う。権威の上に信じられねばならない真理の客観性に対抗して、人間の主観性から出発したとしても、それはもうひとつの選択とはなりえない。もっとはっきり言えば、われわれの主観的経験は、たえずわれわれを脅かす二つの危険性に対処できない。その危険性とは真理へのわれわれの関係、すなわち抑圧と投影である。われわれは、一方でわれわれの好まないもの、見たくないものを避ける方向に行きたがる傾向があり(抑圧)、他方で自らに好ましいものに結び付いたイメージを形成しやすい(投影)。したがってここには、真の解決がない。

それでは真の解決とは何か。私は聖書の中に、私がかつて二人称のパスpekティブと名付けたもう一つの選択を見出す。われわれの現在の存在から遊離した客観的与件からの思惟(三人称)でもなく、主観的経験からの思惟(一人称)でもなく、二人称の中にある人間からの思惟である。より詳しくいえば以

下のようなことである。

まず、創世記1章の神の語りかけのところを見てみよう。神は創造によって語っている。もっと正確にいうと、創世記1章の神の語りかけは、創造の業という特徴的なイメージをもっている。神が語ると、ものがそこにある。神は見える形に呼び出す。神は被造物に存在するように命じられる。したがってこの存在は一つの応答ともみなされる。さらに人間の創造については単に存在を呼び出すのみならず、人格と人格との関係をも据えている。人間にとっては、応答存在という考え方は、被造物としてのその存在に関するメタファーにとどまらず、責任性といった人間存在独自の在り方でもある。人間はある命令をもって、語りかけられている。すなわち自然の管理と共同体の形成を通して、創造主の意図を地上に実現していくのである。人間の存在とは創造主なる神のみ言葉に應えて、神に栄光を帰するか、またはそれを拒否するか、そのどちらかであろう。

神はわれわれに対してある関係を据えるために語り、この方法によってある応答を求めている。この関係における呼びかけは、われわれ人間存在の本質を形成している。ここからイエスの、神を愛し隣人を愛せよ、というあの偉大な戒めが定式化される。この呼びかけにおいては、われわれはまずなによりも話しかけられるものとして、二人称の“あなた”として存在させられている。

この見方をもう少し別の面からはっきりさせて見よう。われわれは自分自身をどのように理解しているか。われわれが人間としてまた独自の人格として何者かという観念は、どのようにして形成されるのか。固有の私という観念、人間としてまた独自の人格としての自己という観念は、ちょうど植物が種から発展していくように、第一義的に子供のときからの発達により、内的な核から、もともとの主体性から成長する、というものではない。自己という観念は、一人称の私自身をもって始まるのではない。また、人間としての私とは何者かという観念は、まず、人間とはどういう存在かということを私が聞くことによって育つ、ということでもない。それは、あたかも、私自身がすでに人間を知り、かつそれが意味するところの観念を知る以前に、私が私自身について三人

称での知識を適用できるかのごとく考えることにほかならない。健全な人間自身にとって根本的なことは、われわれが、それ自体として、他者から、まずは両親ないしは養育者から、知られかつそれなりの取扱いを受けている、ということである。つまり話しかけられる人格なのだ、ということである。私とは、まずは、二人称における‘あなた’としての人間である。私の自己観念、一人称における私は、私の方向に向いてくる他者への応答として育つ。

しかしながら、われわれの自己観念にとって、人間の間関係がいかに重要ではあっても、私の人間としてのアイデンティティの起源はそこには見い出せない。これらの関係においては、人間存在というのはいつもすでに与えられていて、他者すなわち私に話しかけてくるその人によって前提されている。もし私が私の存在それ自体を話しかけられる存在として理解するならば、私は、人間としての私のアイデンティティを、私であることの独自の人格を、究極的には、私の全存在の起源が、それにまつわるすべての構造とともに、人格と人格の関係の中に見い出されるときにのみ、理解することができる。その最終的なものは、神の創造のみ言葉とともに与えられるのである。

これは、教会がそれについて語っているような、神の啓示についてのわれわれの理解に対して、何を意味しているのだろうか。それは、聖書がそれについて語っている神の言葉に対して何を意味しているのだろうか。神はある関係を結ぶために、また、いかにしてわれわれが神によって意図された関係の中に生きることができるかをわれわれに告げるために、語るのである。いかにしてわれわれは、われわれの造り主であり、われわれを愛し、その約束と召命を通してわれわれの生を決めている神との関係の中で、われわれ自身を知ることができるのか。そしていかにしてわれわれは神を知り、愛することができるのか。またいかにして、神の造られた世界の中で、われわれが住み、働き、探究し、祝うために与えてくれた場所の中で、神に栄光を帰し、神に仕えることができるのか。

これらに関して、二つの点を指摘したい。

(a) まず第一に、神の人間への啓示に関連して、改革

派神学でしばしば「適応」ということが言われる。すなわち神がわれわれに語る際に、御自身をわれわれの理解力に合わせるということである。それ自体としては、それは全体としてある関係の側に合わせるという考え方である。もしこれが可能であるならば、ある人の別の人への語りかけは、その語りかけが向けられる当人の性質に一致して、いつでも理解されるものでなければならない。同時に、そうではあっても、その関係の意味からして、適応によっては、聞く者は完全な真理をいまだ理解していないのであるから、そこでは、第一義的には限られた内容以上のことは伝わっていない、ということも明らかになる。そうではあるが、そこで言われていることに対する基準は、あるすでに存在している永遠、不変の真理——この真理は語りかけられた当人の限定された理解力のゆえに、部分的に啓示されうに過ぎないが——の中にいつもあるということではなく、その語りかけのときに意味されていたように、その関係それ自身の中にある。

母親は三か月の子供には三歳や十二歳の子供とは違った話し方をする。その意味で、彼女は彼女自身を適用させているわけである。しかし彼女の語り方は、そのときの関係の中では正当なものである。それゆえ彼女が語っていることは、それぞれの状況の中で適切なものである。彼女は自分の感じることを子供の年齢に合わせて言っている。そのとき、母親の子供への愛ということについて言えば、三人に対して何ら変わりはないであろう。同時に、年齢に応じた違いというものがある。また、彼女は本当は同じことを言いたいのだが、単に年齢に応じた子供の理解力に合わせている、ということでもない。彼女は年齢の違いのゆえに、年上の子にはさらに付け加えて別のことも言いたいのだ。

このようにして、神もまた歴史的状況に合わせて、その状況で神と共に生きるように、異なる仕方でも語られた、と私は思う。また、最初のときからすでに、われわれの主イエス・キリストにおいて明らかになったような、歴史的関係の十分な発展のちでの審判も、また語られていた。

(b)第二に、伝統的神学の観点からは、第三者へメッセージをもたらすためになされる、神による個性あ

る人間の召喚は、しばしば一つの制限とみなされてきた。これは確かな意味において、二人称のパスpekティヴから見れば、制限でも何でもないのである。あるメッセンジャーの召喚はいつも何か間接的な関係を与えている。

しかもそれは、この制限が存在しているメッセンジャーの人間性と関係しているのである。人間のメッセンジャーの召喚は、神の語りかけの中で、彼の具体的、歴史的状況における彼自身の人格的かわりがあるかどうか、ということを示している。したがってエレミヤは、彼の傷つきやすい人格のまま預言者として召されたのであり、それゆえ、エレミヤが神の御名によってもたらさねばならなかった裁きのメッセージを通して、神御自身がその裁きをなしたのである。また、預言者ホセアの、彼自身の結婚生活で体験した不信仰についての苦痛と憤慨は、イスラエルが神へのたび重なる背反をしたことを知らしめるのに役だったのである。また、神はその愛を、まさに、父によって遣わされた御子イエスが歩んだ道全体を通して、語ったのである。(以下次号)

(注)

*Filosofie en Theologie 目次

- P. Vos 「キリスト教信仰と超越論哲学、その関係
コミュニケーションの可能性」,
- G. van den Brink 「キリスト教哲学と神学の間の
コミュニケーション」,
- R. van Woudenberg 「哲学と神学、信仰と真理」,
- J. Douma 「神学と哲学の間の原理的關係」,
- K. van Bekkum 「哲学的解釈学と改革派神学」,
- H. G. Geertsema 「改革派神学の行き詰まりの背景と
そこからの脱却」,
- S. Meijers 「神学と哲学の解釈学的前提」,
- W. J. Ouweeneel 「聖書の神学の哲学的プロレゴメナ」
- J. Hoogland 「正統主義、近代主義、ポスト・モダン」
- A. L. Th. de Bruijne 「主に根差し固く立つ」,
- C. E. Evink 「神学的方向転換の必要性」

- (1) S. Meijers, 'Een dogmatische meditatie over een meditatieve dogmatiek', *Theologia Reformata* 36(1993), p. 23-39. また S. Meijers, 'lets over rekenschap en betrokkenheid van gereformeerde theologie', *Theologia Reformata* 38(1995), p. 96-127 も参照.

- (2) 私のアプローチの背景については次の論文を参照
'Relationele waarheidsopvatting en schriftgezag', *Theologia Reformata* 31(1988), p. 130-150; *Het menselijk karakter van ons kennen*, Amsterdam 1992; 'Heeft de gereformeerde theologie een boodschap voor de wereld?' in: *De vitaliteit van de gereformeerde theologie*, uitgave GWG 1995, p. 7-14; *Om de humaniteit*, Kampen 1995.

The Charismatic Movement and Japanese Culture. Part 2

Dr. W. Robert Shade

2. The Charismatic Movement and Japanese Culture.

2.1 Japanese New Religions

In a recent article Brian McVeigh, a specialist in study of the Japanese "new religion" known as "Mahikari," mentions some behavior that is startlingly similar to that seen at Toronto.

In Mahikari, spirit possession roles are characterized by shaking or wagging the head; rocking one's body back and forth; grimacing or making other faces; drawing characters with one's finger on the floor (spirit writing); groaning, weeping, speaking in another's voice or in classical Japanese; or the more involved movements of crawling around on the floor like an animal; brandishing a sword, ritualistic suicide by disembowelment (very popular, especially among younger members); or winding up slowly for a punch and then striking the air, a favorite of young men in the doojoo I frequented.¹⁾

Of course there are clear cultural differences. There is no equivalent to spirit writing, speaking classical Japanese, or ritual disembowelment at Toronto. It is evident that there is a certain amount of copying the behavior of others in the Mahikari doojoo. Otherwise it is hard to explain McVeigh's choice of the word "popular." One wonders how much of the behavior on the carpet at the Airport Church is "monkey see monkey do." I do not imply that everybody is "faking it." But the strange behaviors exhibited in the meeting offer a "menu" of possible choices for those seeking a strange experience. This "menu" of behaviors is limited by culture. The motions of ritual disembowelment, for example, have not been reported in the Toronto meetings, nor has roaring like a lion been reported in Mahikari meetings.

There is also a similarity in bodily sensations as that reported in the charismatic movement. "As for bodily

sensations, some Mahikari members reported feelings of heat on the forehead, seeing colors, tingling sensations as if an electric current was running through the body, and deep relaxation."²⁾

This is not to imply that the spirit possession of Mahikari and the phenomena (Holy Ghost possession?) of Toronto are really the same. The differences outweigh the similarities. The spirit possession of Mahikari invariably involves the alleged possession by spirits of the dead who bear a grudge and torment the living to get some relief from their suffering. McVeigh gives two examples. A woman who in a previous life was once a cruel and terrible mother-in-law who drove her daughter-in-law (the possessing spirit) to suicide. The spirit, in order to seek revenge, disrupted her marriage.³⁾ Another case cited by McVeigh is that of a young man who suffered anxiety and insomnia. When the man went into a trance, he muttered, growled, and screamed. This was supposed to be the spirit of a samurai who had been killed by the young man in a previous life.⁴⁾ Such stories are very typical of Japanese shamanistic religion but have no counterpart in Toronto.⁵⁾

Japan is experiencing a quiet "boom" in "new religions" since the early 1990's. Books on the spiritual world (霊界) and spiritual power (霊能) are selling well, especially among young people. Some of these religions are very small, with several hundred believers and only one meeting place (道場). Others have a large membership, with hundreds of meeting places, nationwide organization, luxurious "headquarter" temples, and widespread literature distribution. Mahikari has over 420,000 adherents and a central temple that cost over 300 oku yen.

Invariably the central figure of the religion is a female sect founder (教祖) with strange spiritual powers and charisma. The ceremonies and gowns and paraphernalia of the religions are a mixture of Buddhist and Shinto elements but the Shinto elements seem to

predominate. The kyooso phenomenon goes back to the most ancient indigenous Japanese religious tradition, the female shaman. Shamanism is found in primitive cultures around the world, but was particularly strong in northeast Asia, from Siberia to Okinawa. It is still found among the Ainu and the yuta and noro of Okinawa. Princess Himiko of Yamatai, the earliest known Japanese kingdom, was probably a shamaness. The shaman does not have to be a woman; hermit ascetics called yamabushi were men.

Whatever their sex, the shamans are people who have access to the spirit world of gods, and what are alleged to be ancestral spirits. When they are possessed by these spirits they serve as mediums to clients suffering from various problems, usually sickness. By various incantations and ritual movements they go into a trance, during which they are possessed by the spirit allegedly causing the problem. The spirit then pours out its complaint. The anger of an aborted child. A samurai killed by the client in a previous incarnation. A spirit who could not attain Nirvana (成仏) trying to get someone's attention. Then the spirit is placated with appropriate ceremonies, and the client experiences relief from her suffering.

It may seem uncharitable to compare charismatic movements in the Christian church to oriental shamanistic religions which seem thoroughly demonic in nature. However, it may be a sobering caution for both charismatic and non-charismatic Christians to consider some of the similarities.

2.2 Disturbing similarities between the charismatic movement and shamanistic phenomena.

1. The deliberate dismissal of the mind.

One of the most disturbing aspects of John Arnott's preaching is his frequent suggestion that the mind of man, the rational element, is a barrier to experiencing the deeper things of God. Although we can agree with his statement "We must have faith in God and what He does even when we do not always understand,"⁶⁾ he is going too far when he says "You'll never find the heart of God

with the mind; you find Him with the heart. It took me years to figure that out."⁷⁾ During one meeting, before the invitation, Arnott was pre-empting the doubts of the people: "This is a heart issue, not a head issue. So you can say to your mind 'you just wait and I'll tell you later what happened.' If you try to analyze it at the time, it interferes with intimacy."⁸⁾ In the same message, in quoting Jesus' response to the question "What is the greatest commandment?" "Thou shalt love the Lord thy God with all thy heart and with all thy soul and with all thy mind" (Matt 22:37; Mark 12:30; Luke 10:27) he left out the phrase "and with all thy mind." Thus the mind is put into neutral and has no defense against the irrational or inhibitions against embarrassment. Indeed, according to Arnott, to cling to the mind at such a time is a mark of pride, and a failure to achieve the childlike state the Lord requires before He can bless.

One sees this same "anti-mind" or irrational element constantly in Japanese religion. Ichiroo Hori, an expert on the study of Japanese ethnic religions, wrote this about the proverb 日本人は熱しやすく冷めやすい ("Japanese people are quickly hot, quickly cold"): If there is any truth in this proverb, it may be that the character of Japanese people is inclined not so much to the rational as to the irrational, not so much to logical as to the emotional—and thus that the character they exhibit is easily given to temporary, small-scale enthusiasms."⁹⁾

2. The Hypnotic State.

Hypnosis has been alluded to before in this article, but I sum up this claim with a very illuminating word from Brian McVeigh:

What happens if these elements of the subjective inner world (mental space and self) are temporarily suspended? Usually nothing. Suspension of consciousness happens all the time. However, if an individual is placed in a thoroughly unchanging environment so that consciousness - which is most actively engaged when someone is faced with a changing, stress-inducing situation - is radically altered and loses a primary reason for functioning, interesting

changes occur. The state can be obtained with the aid of another who persuades the individual to accept the perceptual consistency of the environment through suggestions and commands. It is commonly called hypnosis, but for my present purposes can be referred to as the diminishing of consciousness. Consciousness and diminished consciousness (trance) can be placed on a continuum. ¹⁰⁾

"Diminishing of consciousness" is exactly what happens during Toronto-style "carpet time." The same effect can be obtained by means traditional to almost all religions: fasting, sleep deprivation, severe ascetic exercises (苦行). Is the Toronto movement unwittingly using some of the same techniques?

3. The Deliberate Cultivation of Hysterical Phenomena.

Hysterical phenomena are not unique to the carpet of the Airport Church. They have occurred in every major world religion and are common in primitive religion, particularly shamanism. Myoohoo Ooshi (明峰桜紫), kyooso of Koomyookai (光明会), at age 27 was allegedly possessed by the sun goddess, Amaterasu-oomikami. The climax of her meetings at her center in Fukui Ken (Yoshida Gun) is called Taishitsu Kaizen (体質改善). During this time she dispenses oomura (おおむら), a spiritual power that causes her followers to collapse and stagger backwards uncontrollably. They laugh and cry out, not so much from spirit power, I think, as from embarrassment. They are fully conscious of what is happening but seem unable to resist it. (Video segment) It is all good fun, and the people report feeling relaxed and refreshed.

Things are a bit more serious at the Myoohoo doojoo (明法道場) of Yoshimi Miyasaka of Ryogoku, Tokyo. Believers there fall into a trance, and some tremble or wave their arms spasmodically. Others report heat in their face and improved eyesight.

In the case of the highly publicized Oomu Shinkyoo, such phenomena, seen by the entire nation on constantly repeated TV news programs, were induced by radical austerities and mind control techniques.

A Caution. I have made some very sharp criticisms of the charismatic movement, and particularly the so-called "Toronto Blessing." I have made some very unflattering comparisons with demonic Japanese religions. But this does not mean I doubt that these brothers and sisters are genuine Christians or cultic or heretical. Nor do I think the phenomena are primarily satanic, although Jonathan Edwards warned us that the devil is able to join in and use excesses to damage genuine revival. ¹¹⁾ Nor do I question the motives or the sincerity of the faith of John Arnott and his supporters. Nor do I deny that much good seems to have resulted from "carpet time." For many people something deep and cold and hard has been broken up and melted; a deep psychological release has occurred for many. But the very real possibility of the unwitting use of manipulative mind control techniques should certainly arouse caution among those longing for more spiritual power and should promote strict self-criticism by the movement itself. The dismissal of the mind and the abandonment to animal noises are causes for alarm.

Is Japanese Culture Susceptible to the Charismatic Movement?

My conclusion is both yes and no. The charismatic movement has not swept all before it in Japan as it has in Latin America. It is commonly thought that the Latins are a very emotional people and that explains why they are attracted to the highly charged emotional approach of Pentecostalism. Another factor has been the low educational level in Latin America. The Pentecostal movement (first wave) made no significant inroads in America except among the less educated lower classes. The Latins also had centuries of a form of Christianity - Catholicism. The only thing the Japanese have in common with these people is perhaps emotionalism. But, in contrast to the Latins, this emotionalism is usually completely masked by very rigid social formalities. Nevertheless the emotion is there and it can be very explosive, like an erupting volcano, in certain circumstances. Perhaps the charismatic movement offers some Japanese a legitimate place of emotional expression and release.

Another plus factor for the charismatic movement in

Japan is the irrationalism and blind faith in a “charismatic” leader that accompanies Japanese religious feeling. There is a complete two story divorce between religion and science in the Japanese mind. There is also a pragmatic, this-world-salvation (御利益宗教) bent to Japanese religion. Any religion that offers “signs and wonders” and healing, either psychological or physical, will be attractive to the Japanese. The Japanese as a people are said to have little interest in abstract thought, religion, or philosophy.

However, on the minus side, no form of Christianity, including the charismatic variety, has yet to appeal to the Japanese common people. If they are attracted to religion it is to a religion incorporating the Japanese world view of ancestral spirits, reincarnation, and a multitude of kami; as well as the trappings, vestments, and paraphernalia of Buddhism and Shintoism. Protestant Christianity has nothing that appeals to the eye except possibly a white wedding gown. Charismatic Christianity has so far won many of its converts from other churches and denominations, not from large numbers of converts from the pagan world.

I predict continued slow growth for both the orthodox evangelical churches and the charismatic churches in Japan. The hot and cold “boom” mentality may cause some cooling of enthusiasm for Benny Hinn and the “Toronto Blessing.” But if some indigenous Japanese leader like Korea’s Yonggi Cho appears, we may see more “boom” for the charismatic churches in the future in Japan.

3. Conclusion: The third wave has succeeded in Japan to a degree that the first and second waves never achieved. It has brought a split in the evangelical church. It is claimed by the charismatics that they have the key to breaking open Japan to the gospel. Many Christians are hungry for “signs and wonders” and are frustrated with the glacial rate of growth of the Japanese churches. What is the orthodox evangelical believer to think of the latest charismatic movement? More study needs to be done on the very real possibility that hypnotic and mind-control techniques are being used unknowingly. While making room for more emotional expression in our worship, we

need to be very cautious of mind-dismissal and emotions gone wild. While exercising more faith for the healing of the body, we need to firmly resist the notion that healing is the will of God for everyone. Leaders need to beware lest they be idolized as living-god gurus. Then we must remember that ultimately only God’s truth will prevail. If tongues is a learned human behavior and not a divine gift, and if “soaking in the Spirit” or “getting drunk in the Spirit” is an unscriptural abuse they too shall pass away. We cannot build Christ’s church on shifting sand.

- 1 Brian McVeigh, “Spirit Possession in Mahikari,” *Japanese Religions* 21 (2), 290.
- 2 McVeigh, 290.
- 3 McVeigh, 292.
- 4 McVeigh, 293.
- 5 Japanese Shamanism is a field of research all in itself. See Carmen Blacker, *The Catalpa Bow: A Study of Shamanistic Practices in Japan* (London: George Allen and Unwin, Ltd., 1975). This book is available in Japanese translation: 「あずさ弓」 (東京: 岩波書店、1979)。
- 6 Arnott, 123.
- 7 Arnott, 122.
- 8 Message by John Arnott, April 3, 1996, Nagoya. Tape JA+2V, “The Importance of the Love of God.” Faith Tapes, 664 兵庫県伊丹市私書箱 4 号。
- 9 Ichiroo Hori, “Shamanism in Japan,” *Japanese Journal of Religious Studies* 2/4, December 1975, 284.
- 10 McVeigh, 287.
- 11 “We may observe that it has been a common device of the devil, to upset a revival of religion; when he finds he can keep men quiet and secure no longer, then he drives them to excesses and extravagances...” Richard L. Lovelace quoting Jonathan Edwards’ *Treatise on the Affections* (Christianity Today : September 11, 1995), 31.

* 定期講読ご希望の方は、研究所までご連絡下さい。

共立基督教研究所

「共立研究」

編集委員長 稲垣久和
編集者 小林高德